

 書評

上島国利, 樋口輝彦, 野村総一郎, 他 編

気分障害

鈴木道雄

近年の気分障害を巡る状況は大きく変化している。一般社会におけるうつ病の認知度は向上したが、それに伴い誤解や混乱も増している。精神科医療の現場では、気分障害による受診者が急増するとともに、従来のメランコリー型うつ病とは異なる現代型うつ病が増加し、その対応に苦慮する場合が多い。SSRI や SNRI の導入、種々の治療アルゴリズムの開発、認知療法の普及など、治療面での進歩は少なくないが、依然として難治例が存在する。また自殺対策としてのうつ病への介入が大きな課題となっている。このように問題が山積している一方で、気分障害の研究は活発化し、さまざまな領域で新しい知見が得られている。精神科医療に携わる者にとって、気分障害の全体像を捉えなおして知識を整理し、今後の診療に役立てたいという気持ちは非常に強くなっている。このような時代の要請に応えるべく、刊行されたのが本書である。

B5 版、二段組、650 ページを超える大冊である。内容は、各専門領域のエキスパートによる分担執筆であり、編者が「気分障害のエンサイクロペディアを目指した」というごとく、質、量ともに非常に充実している。冒頭において、混乱しがちな気分障害の概念と用語について、どのように統一を図ったかを編者が明記しており、その原則の下で執筆陣が存分に筆を揮っている。わが国におけるスタンダードな内容を詳述すると同時に、歴史的な内容、必ずしも一般的ではない内容や海外における新しい動向にも十分な説明を加えている。研究面の知見が豊富に記載されていることも特筆に値する。さ

らに参考文献数がことさら制限されていないため、必要なときは原典にあたることが容易となっている。目次も詳細で 9 ページを数えるが、お蔭で知りたいことがどこを見れば書いてあるかすぐわかるようになっているのも編者の配慮であろう。

序章を含めて、全体で 28 の章で構成されている。序章から第 9 章が第 1 部(総論)であり、全体の半分以上を越えるボリュームがある。ここでも細大漏らさずという編者の意図は徹底しており、わずかな遺漏もないように、編者自らが補筆している項目も見受けられる。第 10 章から第 19 章が第 2 部(疾患各論)となっている。第 20 章から第 27 章が第 3 部(臨床上の諸問題)であり、ここで気分障害に関わる今日の問題を改めて取り上げていることが本書の特徴のひとつである。ちなみに第 3 部各章の表題を列举すると、難治性うつ病、軽症うつ病、自殺、併存(コモビディティ)、ライフサイクル、一般医・コメディカルとうつ病診療、職場のメンタルヘルス、抗うつ薬の臨床試験、となっている。

気分障害の概念、診断、治療が混沌としている現代にこそ必要な、まさに気分障害のエンサイクロペディアと呼ぶにふさわしい重厚な 1 冊である。気分障害の診療に携わる人が、必要なときにいつでも手に取って参照するのに最適であり、気分障害の臨床的・基礎的研究を志す人にとっても必携である。

(富山大学大学院医学薬学研究部 神経精神医学講座教授)

●B5 680 頁 2008 定価 16,800 円(本体 16,000 円+税) 医学書院